

第三矢 散り果てて

——仁平元年（二一五二）三月朔日、大内裏・宴ノ松原

1

春の夕べは、恋心をいつそう掻き立てるものらしい。

足早に禁裏を出た頼政は、橙色に染まり始めた西へ向かう。

（てんやわんやで、遅れてしもうたわい）

禁裏では近ごろ、牛馬や犬が殺される奇妙な事件が続いていた。いずれも臓腑を喰われた骸で見つかるため、すわ鶴ぬえの仕業かと大騒ぎになり、蔵人所くらうじゆしんじゆの仕事は増える一方だった。悪戯にしては度を越しているから、後宮における二后の争いとの関わりも噂されていた。

これから、萤火との三度目の逢瀬だ。早めに行って待つつもりが、出仕するなり「昨夜また牛が喰われたのじゃ」と聞かされた。清目きよめを手配して始末させ、陰陽寮の陰陽師しえに死穢はらを祓わせた。牛馬はもちろん、禁裏内にも番犬や猟犬がいるから、これ以上被害が出ないよう、改めて夜の警固について確かめ、いろいろ指図するうち、気付いたら日が傾いていた。

ともかく、今日は恋歌をひとつ、萤火に捧げようと決心していた。

歩きながら、用意してきた一首を反芻はんすうしてみる。

へ あさましや 浅 おさふる袖の下くぐる 涙の末を 人や見つらむ 押

恋しさが募り、目を押さえる袖の下をくぐって流れる涙を、誰かに見られはすまいか。

恥じらいの気持ちを素直に歌にしてみた。実際に涙したわけではないが、頼政の恋心は燃え盛っている。

宴ノ松原に入った頼政は、ずんずん進む。

この森には依然として邪気を感じるが、今ではもう慣れた。

待ち合わせ場所は、二人が初めて出会った大岩だ。

蕾 つぼみ を付け始めた一本の桜木の下に、螢火の姿が見えた。

うつむき加減で、何やら脱いだ小桂 こきい を大切そうに腕に抱き締めている。

自分でも持て余すほど、胸がときめいた。

「螢火、待たせたのう。何をしとるんじやな？」

顔を上げた女のほおを伝う涙を見て、頼政は愕然とした。

「何とした!？」

螢火は涙顔で、小桂に包んだ何かを抱えている。

「かわいいそうで……」

腕の中を見て、頼政は背筋が寒くなった。

白い犬の骸だ。まるで鵺にでも喰われたように、ごっそり臓腑がなかった。

辺りを見渡すと、犬の肉片や血が飛び散っている。

「わしが預かろう」

うら若い女に持たせているのを気の毒に思い、頼政は螢火から小桂を受け取った。腹のない犬の骸は、哀れなほどに軽い。

「どうして、こんなことに……」

途切れとぎれの言葉でも、容易に事情は察しえた。

螢火がここへ来ると、野良犬の骸が転がっていた。見るに見かねて自分の小桂を脱ぎ、抱き上げたものの、どうしていいかわからない。そこへ、頼政がやってきたわけだ。

見れば、小桂だけではない。螢火の桂は胸元が犬の血肉で汚れていた。
形なりふ振り構わなかったのだろう。心優しき女性だ。ますます好きになった。

「桜の下に埋めてやろうぞ。さすれば春が毎年、花を手向たむけてくれる」

螢火が涙を浮かべながらうなずくと、頼政は犬の骸をそつと地面へ置いた。しゃがみ込み、両手で穴を掘り始めた。近くにあった石や棒も使う。

「わたくしも……」

赤い血で汚れた白い手が、隣から伸びた。

二人で黙々と手を動かすうち、犬を埋葬できるくらいの穴ができた。

骸を穴の中にそつと横たえ、掘り返した土で埋め戻してゆく。

やがて、小さな塚ができた。

「これくらいしかしてやれんが、成仏してくれい」

頼政は合掌し、南無阿弥陀仏を唱え始めた。隣から小さな声が合わさる。

ささやかな弔いを終えると、春の森が夕風にさわさわと柔らかい音を立てた。

螢火はすっかり憔悴しょうすいした様子だ。無理もない。

「一月も二月も鶴は現れなんなのに、最近の禁裏は物騒じゃからのう。お前の身の回りは大事な
いか？」

螢火は救いを求めるように、頼政に反問してきた。

「鶴とは、どのような異形なのでしょう？」

「わからのう。黒雲の中に隠れとって、姿さえはつきりせんからな」

空を飛ぶから巨龍だ、天狗だ、あるいは雷獣だと断言する者もいたし、頼光よりみつが退治した土蜘蛛つちぐも
が生き返ったのだとか、様々な噂が流れていた。

「宮中では、早良親王さわらの怨霊に違いないと、女官たちは噂しておりますが……」

「おお、怖いことを申すのう」

ガハハと豪快に笑ってみたが、暮れかけの森に頼政の馬鹿笑いが空しく響いただけだ。

「元気を出さんか、螢火。わしがお前を守ってやる。無官なれど、武芸では誰にも負けん」

朗らかに励ましても、螢火はまだ不安そうだった。

「わしは頼まれて禁裏にもよう出仕しとるでな。何ぞあったら、蔵人所に知らせてくれい。そう
じゃ、図書寮ずしよりょうの井戸を拝借して、手を洗おうぞ」

努めて明るく声をかけると、螢火はようやくよく自分を取り戻した様子でうなずいた。

暮れなずむ春空の下、宴ノ松原を北へ歩く。

寮から洩れる明かりが暗がりくらがりに浮かんできた。

「遅うまで仕事をしとる役人もおるんじやのう」

まだ誰かが働いているらしい。人知れず懸命に働く者たちの力で、平安京は支えられている。

「お上手ですこと」

物悲しげな筆簾ひしりきの音が聞こえた。風流ないい調べだ。気晴らしに吹いているのか。

井戸端で、引き上げた桶の水を、螢火のほっそりした手に少しずつかけてやる。

こすり合わされた手が、みるみる白くなってゆく。

それにしても白い肌だ。青みがかってさえた。

女らしい細い手を見ながら、かつての恋を思い出した。

十五年前、二人目の愛妻を亡くして傷心の頼政は、中宮に仕える女房みやまぎの深山木と恋をした。蔵

人として禁裏を出入りし始めた初日に垣間かいまみ見えて見染め、恋文を交わした。下級貴族の娘で、ひと

月もせぬうちに夫婦めおとになる約束をした。深山木をもらい受けようと実家に出向いたところ、父親

とも意気投合し、立派な太刀まで譲り受けた。流行りはやの反りがあつて、見事な鎬造りしのぎづくだった。

ところが、それから数日後、深山木は神隠しに遭った。時を同じくして、黒雲をまとった狼の

異形が現れ、女官が臓腑を喰われる事件が起こった。頼政は異形を斬ったが、深山木は戻らな

った。可哀そうに喰われたのだ、と噂されていた。

頼政は自分も手を洗いながら、螢火を見つめた。

「宜秋門ぎしゅうもんまで送ってやろう」

螢火の住む禁裏には、おそらく異形が棲んでいる。また、現れたのだ。

以前のように、異形はいずれ必ず人を襲うだろう。今度こそ、想い人を守りたかった。

「のう、蛍火。何でもわしに話してみい。相談に乗るぞ」

蛍火は少し思案してから、ぼそりと応じた。

「すぐ近くで、まがまが禍々しい邪気を感じる時があるのです」

「どんな時じゃな？」

頼政のように靈感があるのだろう。優しく問い返してみたが、返事はなかった。

問い詰める話でもあるまい。いつか話したい時に、話せばいい。

辺りは暗くなっていた。今日は犬の骸のおかげで、恋どころではなさそうだ。

別の話題がよかろう。頼政の得意は、歌だ。

「わしはいつも首が回らんでな。いつじゃったか、歌合せで馬鹿にされてのう」

貧乏のためきな生成りの狩衣を着て出席したのだが、当てこする歌を詠まれたため、頼政は即座に

返して見せた。

〱 狩衣 われとは摺すらじ 露し繁げき 野原の萩はぎの花に任まかせて

衣には草木の汁をこすりつけて色を着けたりするが、頼政はあえてしない。野辺の道をゆけば、たくさん露が付いた萩の花が、ひとりで色を着けてくれるから、と応じたわけだ。

歌の心まで説明すると、蛍火はへえという顔つきをしていた。

「他にもあるぞ——」

得意になって語り続けたものの、頼政は心配になってきた。

「歌の話ばかりで、つまらんかのう」

「そんなことはありません。頼政さま、わたくしに歌を教えてくださいませんか？」

「おお、お安い御用じゃぞ」

歌への関心も、二人がまた会う理由ができたことも、嬉しくてたまらなかった。

「ではまた、新月の夕べに」

宜秋門が近づくころには、螢火はいつもの元気を取り戻していた。

想い人の姿が門の向こうで見えなくなるまで、頼政は見送っていた。

2

桃の節句の京はどことなく、華やいでいた。梅花は散り果てても、桜が蕾をふくらませ始めている。きつと宴ノ松原のあの桜も同じだろう。

頼政主従は往来の多い土御門大路を歩いた。行き違う牛車ぎっしゃのせいで、ひどい混雑だ。

「のう、隼太。歌合せの誘いじゃろかな」

早朝の散歩から屋敷へ戻ると、不在の間に指御子さすのみここと安倍泰親あべのやすちかが頼政を訪ねてきたらしい。いったん出直すが、もし足を運んでくれれば歓迎する、と伝言して帰ったという。派閥が違う上に、泰親はさして歌を好まぬようで、面識がなかった。

「鶴退治まであと十日余り。泰親殿とて、のんきに歌など詠んでおる場合ではありませんまい」

「歌は人生の悲喜こもごもを題材とするんじゃないぞ」

へ おのづから 花の下にし やすらへば……

即興で作ってみせようとしたが、頼政は珍しく苦吟した。

「上の句だけで十分でござる。某は歌人でなく、日ノ本最強の武人にお仕えしておりますゆえ」

隼太は不愛想に応じてから、声を落とした。

「されば用件は、鶴絡みとしか考えられませぬ」

先月の望月夜は泰親の采配の下、あわわノ辻でけびいし検非違使の源為義みなもとのためよしの手勢が異形の出現を待ち構えていた。戦いくさでも始めるように物々しい布陣だった。頼政主従も観戦に出向いたが、夕方から降り出した雨のせいか、黒雲が湧いただけで、鶴は現れなかった。

「もしも為義殿の下に付けという話なら、断固お断りを。撰津源氏とて、腐っても鯛でござる。

そこまで落ちぶれてはおりませぬ」

「わかっとする。何度も聞いたわい」

今さら撰津源氏こそが源氏の嫡流だと言い募る気もないが、武家としては少なくとも同格だ。

鶴を退治すれば、為義は大いに武名を高め、両家の差はさらに開くだろうが、頼政も誇りを捨てる気はなかった。

「噂によると、泰親殿は気障きざたらしく鼻に付くお人だとか。くれぐれも短気を起こされませぬよう。出世の糸口を掴めるやも知れませぬゆえ」

位階こそ正四位下ながら、泰親は安倍本家の総帥であり、陰陽道を通じて公卿と深い繋がりを持っていた。左大臣よrina頼長の覚えもめでたく、鼻息が荒い。

「相手は公卿でもない。同輩じゃ。媚びるつもりはない」

じゆさんみ
従三位以上の公卿との間には歴然たる身分の差があるが、四位以下の貴族は抜きつ抜かれつの同格だ。官職による貧富の差は侮れないものの、せいぜい座次くらいの差しかなかった。

「さすがは大きな屋敷にございますな」

土御門大路に面した屋敷は、せいめい清明以来の栄達を誇る寝殿造りで、頼政のぼろ屋敷とは比べ物にならなかった。

へ オン アボキヤ ベイロシヤノウ

家人に案内されて透渡殿すいわたどのを渡るうち、祈祷の声が聞こえてきた。陰陽道を学ぶ弟子たちだ。

「頼政殿、よう来てくれた」

派手な紫の狩衣に身を包んだ男が真紅の鉄扇を手に、踊りのように大仰な仕草で、来客を歓迎した。

泰親は馴れ馴れしく瀟洒しょうしやな一室へ頼政を誘い、対座した。隼太は後ろに控える。

「歌人としての噂はよう耳みみにしておる。貴殿の歌で、私の好きな傑作があつてな」

へ 恋ひ恋ひて まれ稀にうけひく玉章たまづさを 置き失うしなひて また歎くかな

男にしては高めの声で諳そらんじてから、泰親はカラカラと笑った。

「恋い焦がれて、せっかく受け取った返事の文を失くして嘆くとは、迂闊うかつにもほどがある。いつたいどんな御仁かと思うておったが、さもあらん」

腹を抱えて笑う陰陽師を見て、頼政はムツとした。

大切な物をしまい込みすぎて、在り処がわからなくなるのは本当の話だ。頼政は確かに粗忽でうっかり者だが、生まれつきだから、いたし方なからう。

「お主は、わしの歌を腐すために招いたのか」

「あいや、赦されよ。私は歌なんぞに毫も関心はない。今日は歌人でなく、武人としての貴殿に大事な話がある」

頭ごなしに歌を否定されて、頼政はまた腹が立った。

席を立とうかと腰を上げかけたところ、後ろから「殿！」と鋭い囁きがし、思いとどまった。

「用向きは単純だ。鶴退治で、手を貸してもらいたい」

さらりと口から出た依頼に、頼政は洒落男をじろりと見た。

「すまぬが、河内の下に立つわけにはいかぬ。摂津にも意地があるでな」

「むろんだ。私は貴殿と共に戦いたい」

「為義殿は？」

「身内に不幸があつたゆえ、死穢でひと月、物忌みとなった。ついては貴殿に代わりを務めてもらいたいのだ」

考えもしなかった展開である。政争はすこぶる苦手だが、思案してみた。

頼政を待賢門院派へ鞍替えさせる気か。頼政は家成の傘下として美福門院派に属している。二人の仲を裂く離間の計か。だが、落ち目の摂津源氏など、わざわざ味方に引き入れる値打ちがあるだろうか。

泰親は手の鉄扇を弄もてあそびながら続ける。

「今朝もまた、禁裏で惨むじたらしい獣の骸が見つかった。騒ぎは大きくなる一方だ。京の誰もが注目する中で鶴退治に失敗してみよ。檢非違使の沽券こけんに関わる。ひいては京の治安を害する仕儀ともなりかねん。左府さふ様も色々思案されて、為義殿を外されたわけだ」

子飼いの武家の面目が潰れば、今後の政争で不利になると考え直したわけか。河内源氏としても、失敗で失うものが大きすぎるから、勝負を避けたのだ。

「陰陽師の私は逃げようがないが、為義殿としては、貴殿を捨て駒にして小手調べをする肚もあるう」

裏がわかってくると、頼政はムラムラと闘志が湧いてきた。

「摂津源氏は年がら年中、火の車と聞いた。鶴を退治した暁には、貴殿の借財を当家がすべて肩代わりしてやる。大いなる名誉を得て、出世もできよう。悪い話ではあるまい」

頼政は心を大きく揺り動かされた。

一族郎党の安堵した顔が思い浮かぶ。子らも、今よりましな暮らしができるはずだ。

「じゃが、お主と組むなら、中納言様に仁義を切らねばならぬ」

頼政は家成の家臣ではないが、世話になってきた義理がある。利害や打算ではない。頼政の生き方として、恩義や道理に反する真似はできなかつた。

泰親は涼しい顔で応じた。

「実はもう話をつけてある。河内源氏の代わりに借り受けたいと申し入れたところ、摂津源氏としてでなく、あくまで一武人として力を貸すなら吝やぶせかでないと了を得た。私は雅楽頭うたのかみも務めて

いるが、あわわノ辻は雅楽寮の至近ゆえ、家成卿にはそこで見物してもらおう」

妥協の真意は知れぬが、家成が認めるなら断る理由もなさそうだ。肩越しに振り返ると、隼太が大きく頷いてきた。

「引き受けた。して、どうやって倒すんじや？」

「とくと思案してある。われらは鶴と戦いくをするのだ。中原なかはら」

廂ノ間から現れた陰陽師は、ぼつてりとした色白の五十絡みの男で、皺ひとつない狩衣に身を包み、ゆつくりと慇懃いんぎんに両手を突いた。

「日本一真面目な男だ。頼りになる」

「どうぞ、お見知りおきを」

中原は丁重な挨拶をした後、主客の間に絵地図を広げた。戦場となるあわわノ辻を中心に、東三条から禁裏までの碁盤の目と、主だった建物が描かれている。

「辻おつては黒雲で何も見えぬ。されば私は、法勝寺ほつしょうじの八角九重塔はっかくくじゅうのとうの上から、黒雲の動きを確かめた」

泰親の扇の先が東三条ノ森から、禁裏の清涼殿までずっと動く。

「黒雲はこの森で湧き立ち、禁裏の清涼殿へ向かい、満月の明るい夜空に、黒き虹のごとき巨大な橋を架ける」

森から清涼殿までの距離は十八町余り（約二キロメートル）。夜よりも暗いあの黒雲は、見るからに異様で、頼政は離れていても禍々しい邪気を感じた。

「理由は知れぬが、鶴が地上に現れるのはあわわノ辻のみ。さて、武家の棟梁なら、いかにして

敵を倒す？」

「手勢があるなら、黒き虹に矢を射かけて、射落とせばよい」

「然り。為義殿もさように言うておったな。されば、千名の射手と五万本の矢を用意した。鶴は黒き虹のどこかに必ずいる。中でも、延びる虹の先端、邪気の強い黒雲が一番怪しいがな。ともかく黒き虹に一斉射を繰り返せば、万の矢のいずれかが、必ず異形の体を貫くであろう。落ちてきた化鳥けちようの首を刎ねるのだ」

黒き虹の架かる直下と付近に弓手を配し、黒雲めがけて盛んに射続けるといふ。

「森から辻近くまで、六百名に三万本の矢を与えて配置する。途中で射落とせばよし。成らぬ時は、あわわノ辻でわれらが残りの兵と共に迎え撃つ。異形の骸で大内裏を穢すわけにはいかぬゆえな」

辻は大内裏にじようの東南角、二条大路と大宮大路おおみやが交わる広い場所だから、戦いやすい。

「ついでには、武者どもの采配を貴殿に任せたい。中原」

「はっ」と畏まった陰陽師が、別の絵地図を広げた。辻を拡大してある。

「当家の陰陽師十六名と、四百余名の武士たちは、かく布陣いたしまする」

辻の中央付近に泰親と頼政が東三条ノ森を向いて並ぶ。

二人を中心とする五芒星ごぼうせいの形に、陰陽師を三人ずつ配置する。さらに二十人ずつ五列で百名の武士たちを、辻の東西南北に布陣させる。計四百名の射手には五十本ずつ、計二万本の矢を用意する。篝火を置く場所、けが人を手当てする薬師の配置まで、事細かに決めてあった。

「頼政殿、これは戦だ。武士と言うても、金に飽かせて雇い入れた命知らずの野武士どもでな。」

貴殿の弓の腕前は当代一と聞く。されば、連中を鍛え上げ、当日の采配を振ってくれ」

これまでは三々五々、功名目当てで全国から集まった腕自慢たちが別々に戦い、敗退してきた。今回はそれをひとつにまとめ、鶴に対して大がかりな戦を仕掛けるわけだ。雇い入れに際しては、中原が武徳殿で競弓をさせ、腕前を念入りに確かめたという。

「黒雲が現れたら、私はわが手の陰陽師と共に、あらゆる術を施して祓う。光明真言を以って邪気を祓えば、辻の上の黒雲も晴らせよう。空にある化鳥を狙って、射落としてもらいたい」

もともと弓は得意だが、食い扶持を得るために今もよく狩りに出るから、頼政の弓術は円熟の域に達していた。

「心得た。必ず見定めて、仕留めてやる」

「貴殿は運が良い。この私と組んで鶴を倒せるのだからな。もしも、他により良き策があるなら、聞かせてもらおうが」

恩着せがましく、憎たらしいほどに自信満々だが、周到で万全な計略に思えた。

鶴がどのような異形であれ、負ける気がしない。

肩越しに振り返ると、隼太も顔を輝かせていた。

「お主の策で参ろう」

「されば、貴殿もこれを身に付けるがいい。尊勝陀羅尼の靈符だ」

差し出された小さな銀の円盤には、梵字が同心円状にぎっしりと記されていた。

「おお、験力がありそうじゃわい。わしの郎党のために、もう何枚かくれんか？」

「絹二十五反くらいの値打ち物だがな。後で作って、中原に渡しておく」

「ありがたや」

頼政はペコリと頭を下げた。指御子の霊符なら、御利益があるに違いない。

「功名に逸る者も出ようが、鶴退治の名誉は、この戦に加わった者たち全員に帰せしむ。ちなみに、次の弥生十五日は鬼宿日。陰陽道における最大吉日だ。鶴を巡る騒ぎを、われらの手で終わらせようぞ」

「合点じゃ。さっそく今日から、弓矢の鍛錬を施さねばな」

「鴨川の河川敷なり、場所の手配は中原と進めてくれ」

話は終わったとばかり泰親は立ち上がるや、そそくさと部屋を出て行った。多忙を極めているらしい。

「頼政殿、助かります」

陰陽師では、癖のある荒くれ者たちを統御できないからと、中原が胸を撫で下ろしている。

「されば、正午に三条の河川敷に集まるよう伝えてくれい。わしがしごいてやる」

「承知しました」

泰親の屋敷を出て、腹ごしらえのために自邸へ戻ると、見慣れぬ若い顔が頼政を待っていた。

「殿、お久しゅう。鳩次にごさいまする！」

隼太の弟で、鶴退治こそ武名を挙げる好機だと文を送ったら、遠江からすつ飛んできたという。日焼けした肌に皓齒がさわやかだ。

「背が伸びたのう。幾つになった？」

兄弟の父は、摂津源氏によく尽くしてくれた忠臣だった。鳩次が生まれて間もなく病を得、頼

政に幼い鳩次を託して逝った。

「十六にございます。兄と同じく短刀をよく学びました」

隼太は短刀の名手で、撰津源氏に伝わる〈骨喰〉ほねばみを授けてある。刃渡り七寸の平造りの業物わざものは鎬しのぎがない平面で、「不動明王」と「八幡大菩薩」の文字を浮き彫りにしてある名刀だ。

「ほう。兄貴のような武者になりたいのか？」

「いいえ。もっと強うなって、撰津源氏を日本一の武家にいたしまする」

頼政はガハハと笑った。鳩次の痩せた背へ手をやる。

「頼もしいのう。されど、こたびの相手は異形じゃ。無理をせんようにな」

鳩次に限らず、若い命を散らせるわけにはいかぬ。

弓兵を鍛え上げ、鶴との戦いくさに勝つのだ。うまく行けば、序盤の戦いで討てよう。

「兄に言われて、遠江の酒を持って参りました」

「気が利く若者じゃわい。今日の鍛錬が終わったら、しこたま飲もうぞ」

頼政が撫で肩へ手を回すと、鳩次ははにかんだような笑みを浮かべた。

3

八角九重塔の瓦屋根が、春の夕日を浴びて煌きらめいていた。

東山連峰を背に聳そびえる法勝寺の朱塔は、都で最も高い建造物だ。白河帝しろかわていにより建立され、約

七十年の間、人間たちが繰り広げる醜みにくい争いを見下ろしてきた。

この境内の空気はいつも凜りんと澄んで、異形の跋扈ぼっこを許す邪気は、微塵も感じられない。

(兄上、どこへ行かれたのだ?)

いつの世も、神隠しに遭う人間はいる。死者でないなら取り戻せるはずだと、広賢は信じてきた。だが、内心では兄の死をほぼ確信している自分が苛立たしかった。

この数か月、広賢は鶴について調べ、考えてきた。

どうやら「鶴」なる異形は、偽物ではないらしい。次の十五夜は、泰親が頼政と組んで退治に乗り出すそうだが、広賢も鶴の存否を確かめるつもりだった。

もしも鶴が本当にいるのなら、その正体は何か。どこから来るのか。

あの黒雲は何か。鶴と黒雲、満月はどう関わるのか。謎だらけだ。

(兄上さえおられれば、鶴ごとき怖るるに足りぬものを)

「先生はここがお好きなのですね」

いつの間にか由良ゆらがそばにいて、眩まぶしそうに巨塔を見上げていた。

「兄上が好きだったただけだ」

「同じことです。先生は晴仁せいじんさまが大好きなんですもの」

由良が袖先を口に当てて笑う。

八つ年長の兄は、弟に手取り足取り陰陽道を教えてくれた。褒められるために、広賢は背伸びを続けた。今では広賢も天才と呼ばれるが、あの兄に比べれば凡才だ。

「ここは、とても空気がさわやかですね」

法勝寺は広大な境内に庭池を配し、朱の太鼓橋を渡している。佳景かけいとして、つとに名高い。

「清潔な社寺なら、どこでも清新な靈気を宿しているものだ」

「ここは格別ですよ。池から吹く風がいいんです」

「風光明媚な名所ゆえ、そう思うだけであろう」

気のない返事をする、由良が口を尖らせた。

「いいえ、胸の真ん中が軽くなって、広がってゆくんです。ここだけじゃありません。最近こゝ緒した場所では、こうりゅうじ広隆寺も格別でした。裏手の林から吹く風には、心を洗われました。あと西寺さいじの五重塔にいる時も、すっかり心がおだやかになります。だから、晴仁さまもお好きだったのでしょうね」

失踪する数年前から、晴仁は頻繁に旅へ出ていた。平安京をくまなく歩き、しばしば遠出もした。残された日記には、訪れた場所が淡々と記されているだけで、訪問の目的を含め仔細はわからない。最初の数年、広賢は各地を訪れるたび妄想したものだ。兄がどこかに隠遁いんとんしていて、笑顔でふらりと現れはすまいか、と。最近は同行する由良が幾つかの場所で靈気を感じると言い、気になってはいた。

「兄上が何のために旅をしていたのか、まだわからぬか？」

「晴仁さまのこともっと教えてくださいませと、何とも」

由良には、晴仁についてあまり話していなかった。いや、誰に対してもだ。

「優しきお人であった」

「先生みたいですね」

「身どもは違う。兄上は優しすぎたのだ」

幼い頃、広賢は父に連れられ、禁中へ参内した。陰陽寮の行事を見たいと、父に懇願したから

だ。初めて見る儀式に興奮したが、その日の夜半、広賢は高熱を出した。薬師を呼ぶと、流行り病をもらってきたとわかった。看病に当たってくれた母が罹患し、やがて亡くなった。

——私が母上を生き返らせてみせる。

母の冷たい骸に取りすがって泣き止まないでいると、広賢の頭を兄が撫でてくれた。

——陰陽道には禁断の術がある。死者を復活させるサムハラだ。私とお前だけの秘密だぞ。

すでに表の陰陽道を極めていた晴仁は以来、裏の世界に没頭するようになった。手すさびに上手くはない腕前の龍笛りゅうてきを奏するほかは、全身全霊を傾けていた。

それは、母を死なせたと悔やむ弟を救うためでもあった。だから広賢こそが、兄を禁断の道へ追いやった張本人とも言える。

「でも先生。魂呼びたまよは結局、無理なのでしょう？」

その昔、藤原道長の娘にして東宮妃だった嬉子きしが身罷みまかった時、陰陽師中原恒盛なかはらのつねもりは禁を犯して〈魂呼びの法〉を行った。だが失敗し、罰せられた。

「表の陰陽道に伝わる法は、他愛もない紛い物だ。サムハラとは違う」

古来、大切な者を亡くした人間たちは、死者の復活を願った。この禁断の営みに手を出した最

初の男が、秦より来たりし徐福じょふくだ。始皇帝しこうていの命で、東方海上の〈三神山〉さんしんざんにある仙薬を探すため

に海を渡ってきた仙人はしかし、道半ばで寿命が尽きた。古事記によれば、「サムハラ」とは最

初に誕生した〈三神〉の意味だ。古来、徐福ら多くの天才たちが試みてきた秘術を集め、試し、

まとめあげ、新たな境地を切り開いた男こそが不世出の陰陽師、安倍晴明だった。その偉大さは、実は表の半分しか知られていない。

「清明がサムハラを禁じたのは、不可能だったからではない。極めて危険だったからだ。ゆえに、世に害悪をもたらす邪道の陰陽術とされ、虐げられてきた」

「わたしは恐ろしい術を教わっているのですね。まだ、何もできませんけれど」

広賢は由良にサムハラを伝授してきた。兄と自分が積み重ねた学びを、己が死もろとも無に帰したくはなかったからだ。

「タカマノハラニ カムヅマリマス……」

傍らで、由良の白い指が手印を作った。

畢竟サムハラは、現世から冥界へ働きかける術だ。広賢の才が乏しいのか、どこかが間違っているのか、それとも術自体がまやかしなのか、術を施しても心身が異様に疲れるだけで、何も起こらなかった。意識が冥界へ飛ぶのか、深い眠りに落ちる時もしばしばだ。深淵から呼び戻されるかのように、由良に揺り起こされたことが何度あったろう。

「先生！ このよき風の秘密がわかりました。池の底です」

池中に光が見えた。もしや、由良が唱えた呪じゆに反応したのか。

バシヤバシヤと、由良が池の中へ入ってゆく。

顔を冷たい水に浸けて、覗いている。

「こんな所に、紫水晶があります！」

広賢も池へ入って、確かめた。

剣山のごとき紫の結晶は大きさが盥たらひほどもあった。藻が付いていないから、古い物ではなさそうだ。

「調べてみる値打ちがありそうだな」

由良が可愛らしいくさめをした。

「先生、袴はかまが濡れて寒うございます。早くお屋敷へ戻りましょう」

衣から滴を垂らしながら境内を出、西へ向かうと、左手に頼政のおんぼろ屋敷が見えてきた。

幼子らが走り回り、ガチャンと何かが割れる音が聞こえた。子犬が吠えている。

「このお屋敷は、いつもにぎやかですね」

「当主があのお調子だからな。躰しっけをする気もないのだろう」

鴨川へ近づくと、橋の上に見物人が群がっていた。

ビュビュビュと、風を切る矢音が続く。

河川敷では、数百のむさくるしい男たち相手に、頼政が弓の稽古を付けていた。

——皆、ようになってきたぞ！ あと百本じゃ！

頼政のどら声が河原に響き渡る。

明け方から日暮れまで、ひたすら鍛錬に励んでいるらしく、都じゅうの評判になっていた。

「戦う前に倒れねばよいがな」

「いよいよ明後日ですね。先生は鶴を退治できると思われませんか？」

広賢は答えなかった。

鶴退治は政争だ。まず、家成が妨害する。忠通も傍観ただみちしているはずがなかった。

事情は知らぬが、検非違使の河内源氏が手を引き、代わりに源頼政が名乗り出た。泰親が派手

な見世物として仕組んだせいもあって、都人は十五夜の決戦を心待ちにしていた。

「恐らくは、黒雲こそが勝敗を決める鍵であろう」

「あれほど強い邪気を感じたのは、わたしも初めてです」

「よく似た黒雲が、書物に二度記されている。一度目は、四百年前の六月。僧玄昉げんぼうはにわか
起こった黒雲に包まれて天へ消え去り、興福寺南大門こうふくじなんだいもんにその生首のみが落とされた」

乱ひろつくを起こした藤原広嗣の怨霊に取りつかれ、殺害されたと伝わっている。

「二度目は、今から二百二十一年前の六月。早魃かんぼつに悩む平安京に黒雲が湧き、禁裏の清涼殿に雷
が落ちて、死人が出た」

この事件は、讒言ざんげんで左遷させんされた菅原道真すがわらのみちざねの怨霊の仕業だとされる。

「いずれも異形は姿を現していないが、人間の怨念が何かの力で具現した時、それは黒い霧や雲
となって目に見えるようになるらしい。兄上はそれを〈怨おん〉と呼んでいた」

由良がじつと広賢を見つめている。

「あの黒雲には感じます。その怨を」

「邪には、邪を以って当たらねばなるまい。表の陰陽術には、荷が重かろう」

「……つまり、あの方たちは負けると？」

由良が弓稽古に励む武者たちを心配そうに見やった。

「われらは学ばせてもらおう。参るぞ」

二人が木橋を渡り切った時、背後で歓声が上がった。

——どんどん上手になつとるぞ！ お主らは勇者じゃ！

頼政ががなり立てると、男たちが一斉に氣勢を上げた。

満ちた月の下、篝火の爆ぜる小気味いい音がした。

各所で焚かれる明かりに煌々と照らされて、あわわノ辻界限はまるで昼間のようにだ。

物々しい甲冑姿の武者四百名と、狩衣姿の陰陽師十五名を配置してから、一刻余りが経つ。

頼政と泰親は大内裏の角を背に、東三条ノ森の方角に向かい、並んで床几しょうぎに腰かけていた。泰親は派手な真紅の狩衣に身を包み、頼政は大鎧ほねばみに身を固めている。そばには、愛刀ほねばみ〈骨喰〉を腰に帯びて隼太が立っていた。

「殿、各陣に当たりましたが、取り違えはございませんぬ」

鳩次が戻ってきた。残念そうに首を横に振っている。

「さようか。ご苦労」

力なくねまらろう頼政の肩に、傍らの泰親が手を置いた。

「戦いが終わったら、左府様にもお願いして捜させる。きっと出て参るぞ」

辻で布陣する最中に、事件は起こった。家宝の雷上動らいじょうどうがよく似せた弓にすり替えられていたのである。

「しよぼくれるな、頼政。一番高価な弓を用意させたではないか」

いや、大事な家宝というだけではない。長年使いこんできた五人張りの強弓は、武人としての頼政の体の一部ともいえた。

「あの弓なら百発百中でも、他の弓なら一、二本は外すんじや」

「われらの失敗を望む者の仕業であろう。この戦いに勝って、罰してやろうぞ」

「皆のために退治すると申すに、陰でコソコソ足を引っ張りおって！」

憤然として足を踏み鳴らすと、泰親が頼政の背をポンポン叩いた。

「貴殿の心を乱すのも敵の狙いだ。乗せられてはならん。そういえば、先日よき歌を詠んだと聞いたぞ」

～ 暮れぬ間は 花にたぐへて 散らしつる 心あつむる 春の夜の月

平清盛の弟、経盛つねもりの屋敷で行われた歌合せに出詠した歌は、螢火を想いながら詠んだ。

昼間は螢火を想い、花びらのように散らしてしまった心を、春月を眺めながら、拾い集める。

鵜退治に向けて死を覚悟し、心身を整えてゆく心境で生まれた快作だ。

螢火はこの戦いを見ていまいが、後に伝え聞くだろう。次の朔日が楽しみだった。

恋の甘い想いに浸っているうち、怒りも落ち着いてきた。

「それにしても、まるでお祭り騒ぎじやな。ちとやりすぎではないのか、御子みこ？」

辻のすぐ北東にある冷泉院れいせいゐんの御所ごしよでは、頼長が首尾を見届けるそうだ。北西に建つ雅楽寮しんせんえんからは、家成が堀越しに見物する。南西の神泉苑はこの日開放され、怖いもの見たさの貴族たちが詰めかけていた。

黒き虹の直下に当たる辻の南東には、木工寮などに弓手をぎっしりと配置してあるが、他の場所は野次馬たちで埋め尽くされていた。皆、見応えのある派手な戦いを期待している。

昨夜の談合で、泰親は最後に真顔で言った。

——左府様を見返してやる。

政略とはいえ、頼長が河内源氏を離脱させたのは、泰親の敗北を恐れたためだ。それがよほど悔しかったらしく、泰親は万全の準備で決戦の日を迎えた。

鴨川河川敷での弓鍛錬は、迫力満点だと見物の人垣までできて、都人の前評判は上々だった。頼長も途中で、政争に使わぬ手はなさそうだと態度を改め、鶴退治は派手な見世物として仕組まれたのである。

「陰陽師も武士も、しょせんは公卿の使い捨ての爪牙そうがにすぎぬ。戦う相手が目に見えるか否か、得物に何を使うかは、違えどもな」

最初は泰親を気障で不愉快な男だと思ったが、中原も交えて幾夜も談合と盃を重ねるうち、今では親しくなり、「御子」のあだ名で呼んでいる。

「拍子抜けするほど簡単に倒してやろうぞ」

誇らしい気持ちもある一方で、頼政は反発を感じていた。戦はそもそも見物するものではない。勝つ側も負ける側も、命懸けの真剣な仕事だ。

泰親は無言のまま応じなかった。

二人は、緒戦の展開について激しく争論した。

頼政は、東三条ノ森に黒き虹が架かり始めた初っ端から全力で討つべしと主張したが、泰親は難色を示した。あまりに早く退治が済めば、見物人たちが拍子抜けするからだ。鶴があっけない最期を遂げれば、恩賞にも響く。ゆえにヒョーヒョーという鳴き声がし、陰陽師の力で黒雲を祓

つてから、武者たちが一斉射で射落とす。これが、見世物としては最も望ましかろうと、考えを改めたのである。

口論になった。せめて黒き虹が完成してからだと泰親は言ったが、頼政は最後まで譲らなかつた。戦では勝利こそが肝要だ。敗れた荒武者たちの無惨な最期と黒雲の異様な禍々しさを訴え続ける、最後には泰親も折れ、「弓矢隊については任せる」と同意した。

「御子。皆に、声をかけて参る」

頼政が立ち上がると、背後に控えていた隼太兄弟が続く。

「丑ノ刻まで、あと半刻だ。はんしき話し込むなよ、頼政」

「わかっるとる」と応じてから、まずは辻の東へ向かった。

明るい月影で、松明も要らないほどだ。

「お主ら、戦の前にちゃんと用を足したろうな？」

緊張をほぐそうと、頼政は朗らかに声をかけた。

「今から命懸けの戦に臨むつてのに、大将の心配はそれですかい？」

「せきがん隻眼の小男が応じると、笑いが起こった。武者たちは頼政を大将だの、將軍だのと好き放題に呼んでいる。

「そんなことより、大将。くどくて済まねえが、誰が射落としても、首をは刎ねても、恩賞はみんな平等。相違ありやせんな？」

頼政はこの初老の男に人をまとめる力があると見て、東隊の長には抜擢した。

「むろんじゃ。武士に二言はない」

「だとよ、みんな。だから、森のすぐそばで誰かが退治しちまっても恩賞あずかに与れるってわけさ。今回ほど割のいい仕事は金輪際ねえぜ」

また笑いが起こるが、頼政は少し苦々しく思った。

布陣直後にも見回りをしたが、今夜の討伐には一抹の不安がある。

自分も含めて、勝利への確信から来る〈慢心〉だ。

敗北に繋がりがかねない慢心は、武人として最も忌むべきだが、今回は得体も知れぬ異形との戦いを不安がる者たちが多かった。ゆえに自信を与えようと、頼政は「勝てる」と説いてきたのだが、裏目に出てはいまいか。

「ゆめゆめ油断するな。相手は異形じゃ。何を仕出かすか知れん」

頼政は重々しく戒めてから、北隊、西隊を回り、最後に南隊へ向かう。

半月にも満たない間ながら、縁あつて同じ戦いに臨む仲間だ。

最初こそ反発する者もいたが、武勇では頼政に誰も敵わない。生きるか死ぬかの戦いだと言きつつ、鴨川で皆を鍛え上げてきた。鍛錬の一斉射で放った矢の数は、延べ百万本を超えるだろう。一番若い鳩次から七十近い老武士まで、腕に覚えのある武芸者ばかりだが、荒くれ者が多い。

抜け駆けして味方の足を引っ張る者が出ぬように、心得違いをしている者、目に余る乱暴者は容赦なく叱り飛ばした。夜は泰親がもてなしを惜しまなかったから、共に酒を酌み交わし、打ち解け合った。隼太・鳩次兄弟、さらには中原の裏方での奮闘にも助けられた。かくて、この戦場にいる者たちは皆、頼政の指図に従うと誓い、「力を合わせて異形を討ち取る」という一点でまとまっていた。

「南はどうじゃな、生臭坊主」

最後の南隊は、叡山えいざんの元僧兵に任せてあった。気のいい男で、よく肥えて女好きの中年は「生臭坊主」のあだ名で慕われている。

「悪いけど、旦那の出番はありやせんぜ。鶴の正体が龍でも天狗でも、夜叉やしやでも山姥やまんばでも、わしら南隊が退治しますからな。のう、みんな」

坊主に応じて、皆が氣勢を上げた。怯えは微塵みじんもない。頼もしい連中だ。

「射落としても、息の根を止めるまでは油断するな。何しろ相手は異形じゃからな」

「わしらにしたら、五十間（約九十メートル）も離れて三寸（約九センチメートル）の的を射抜く旦那のほうが、よっぽど異形ですわい」

また笑いが起こった。

初日の鍛錬で、腕比べを申し出てきた武者がいたため、頼政は遠く鴨川の流れの中に板を立てさせ、射抜いて見よと橋の上から狙わせた。名乗りを上げた大半が届きさえせず、全員当たらなかつたが、頼政は一射的を貫いて見せたのである。

「いま一度、気を引き締めよ」

南隊の武者たちを戒め、薬師らもねぎらった後、頼政は辻の中央へ戻る。

「殿、鶴はそれほど簡単に倒せるのでしょうか。怖くてなりません」

鳩次が青い顔をしている。

戦いの間、鳩次は兄に従ついて戦場を移動し、射落とした鶴の首をすかさず確実に刎きねる役回りだった。

「実はわしも怖い。隼太にせつつかれても、最初は逃げ回ったくらいじゃからな」

鳩次の撫で肩へ手を回した。肉付きにはまだ幼さが残っている。

「じゃが、ひとたび引き受けた以上、逃げはせん。必ず勝つつもりなれど、万一の時は撤退を命ずるゆえ、迷わず逃げよ。生き延びて、次に勝てばよい」

黙ってうなづく鳩次を見て、「兄貴に任せて、お前は抜ける」と口にしかけたが、思いとどまった。鳩次の武士としての若い誇りを、傷つけるわけにはいかぬ。

「お前はまだ酒が苦手じゃったな。明日、美味しい飲み方を教えてやる」

「殿は武芸のみならず、酒豪としても日本一ですからな」

隼太と頼政に挟まれて、鳩次が力強く頷いた。

「勝利の美酒を頂戴いたしまする」

本陣へ戻ると、泰親が退屈そうに真紅の鉄扇でパチリと音を立てていた。

「頼政、ずいぶんにぎやかだったな。貴殿の赴くところ、馬鹿笑いありだ」

「いざ異形が現れば、ちゃんと気を引き締めるじやろう」

鶴は正体不明であるがゆえに、都人の恐怖を煽ってきた。

有象無象の口の端に上るたびに誇張され、大いなる脅威となり、今や都における最大の関心事となった。だが今宵、決着をつける。

「最高の舞台を整えた。演じる役者も揃っている。退治されるべき悪役を除いてな」

泰親は舌打ちしてから、続ける。

「これだけの見世物に仕組んでも、公卿のほとんどは触穢しよくえを怖れて、辻へ足を運ぼうともせぬ。

関白はどこぞで見ているやも知れんが、太政大臣と右大臣はおるまい。自らの目で確かめもせず、伝え聞いた結果だけで物事を決める。かくて世はしばしば、目には見えざるものによって惑わされ、動かされる。畢竟、ありもせぬ噂や風聞、目に見えぬ呪いや祟りで、政が行われるのだ」
放っておくと、雄弁な泰親はいつまでも喋る。

「実は陰陽師も同罪でな。されど左府様の下、私が名実ともに陰陽師の頂点に立った時、政は変わる。変えて見せる。今宵はそのための戦いでもあるのだ」

政に疎い頼政にも、高い志は伝わっていた。平安の世を裏で支配してきた陰陽師たちの醜悪を知るからこそ、泰親は変革を望んでいた。

「勝つぞ、御子。一人も死なせずにな」

「むろんだ。私の心配は、興行としての成否くらいさ」

頼政は平安京の天を見上げた。

春霞の夜空に、望月が高く上っている。月影を遮る雲はひとつもない。

〱 宵の間に 思ひしことを思ふかな 十五夜月の すみ澄のぼる昇まで

頼政が一首詠むと、泰親が声を立てて笑った。

「かような時にも、歌か？」

「すらすら歌が出るのは、すこぶる調子の良い時じゃ」

よき歌が浮かぶときは、弓矢も思い通りに飛ぶ。まず外すことはない。

だが、いまひとつ、下の句がしっくり来ない気もしてきた。

突然、泰親がびくりと体を震わせた。打って変わって、怖いほど真剣な表情だ。

「南東で邪気が強くなった。そろそろだ」

泰親は瞑目し、気配を感じ取るうとしていた。

東三条ノ森に、夜よりも暗い漆黒の霧が立ち上った時、戦いは始まる。

頼政は脇に置いた台からゆがけ礫を取ると、右手にはめた。

5

「森に、黒い霧が立ちました！」

慌ただしく現れた中原の顔は蒼白だ。森からこの辻まで、安倍本家の手の者たちが要所に配置

され、それを中原が統すべている。

「丑ノ刻まで、あと一ツとの由」

陰陽寮に置かれた漏刻ろうこく（水時計）を預かる博士が時を知らせてきた。階段状に並べた水槽に水

を流して時を計るらしいが、あと一つの水槽が満杯になれば、丑ノ刻だ。

「隼太、戦じゃ。赤鬼に合図を送ってほしい」

「畏まってござる。鳩次、指示を出せ」

若者たちがきびきびと動き出す。

東三条ノ森の北東に配置した弓兵隊は、赤ら顔で強面へいめんの男に任せた。異形と戦うには異形をと、皆で「赤鬼」とあだ名を付けた。

ピューーと、甲高い音が何度も聞こえた。

南隊の五名の弓手が赤鬼隊に向かい、派手に音が鳴る鏑矢かぶらやを放ったのだ。戦闘開始の許可である。

南東の空に、もうはつきりと黒雲が見えた。

黒き虹が架かり始めた。濁りのあるどす黒い闇だ。

まもなく一斉射が始まる。

皆、自分が射落としたのだと武勇伝を語りたいたから、自分の矢には印を付けてある。放つておいても、手柄欲しさに、黒き虹めがけて射続けるはずだ。

瓦屋根に反射する月影のおかげで、黒き虹に向かって放たれる矢嵐がよく見えた。

音はまだ聞こえないが、平安京の空へこれほど多くの矢が射られたのは初めてだろう。

やがて、遠くからビュビュビュと、矢音が微かに聞こえてきた。

頼政は吉報を待った。が、使者はひとりも来ない。

まさか、射落とした鶴を奪い合っているのか。

「殿！ 四隊の全列、準備は万端にございまする！」

鳩次の若い声が緊張で上ずっている。

頼政は四方をゆっくりと見回した。

辻の東西南北には、計四百人の射手たちが規律正しくずらりと並び、黒き虹に向かって弓を構えている。

皆、真剣な面持ちで、心地よいほどに壯観だ。士気も高い。

一斉射の音が、次第に近づいてきた。

ボボボボと、鈍い矢音が凄まじい勢いで続く。

「前回より、邪気が強いようだ」

泰親の声にかすかな焦りを感じた。

「予定を早めて、術を施す。頼政、武士たちを頼むぞ」

「合点じゃ」

指御子こと安倍泰親は、辻の中心からやや大内裏寄りに立った。

左手の人差し指と中指を立てて印を結ぶと、五芒星の形に三人ずつ配置した十五人の陰陽師たちに、右手の鉄扇で合図した。

へ オン アボキヤ ベイロシヤノウ

泰親の朗々たる吟詠に続き、陰陽師たちがいつせいに光明真言を唱え始めた。

大日如来の真言は、すべての禍を免れる力を持つという。

まさしく安倍本家の陰陽師たちの力を結集した戦いである。

月に照らされながら、南東の空から迫ってくる黒雲が見えた。

丹田にズンと重みを感じた。禍々しい邪気だ。

ボボボボと、凄まじい矢嵐の音が近づいてくる。

幾千もの矢を放ちながら、まだ誰も射落とせないというのか。信じられぬ。

頼政も立ち上がり、傍らの隼太から強弓を受け取った。

辻の中心で、泰親を背に、南東に向かって仁王立ちする。

「鳩次、兄貴と一緒に化鳥の首を挙げて参れ」

「合点！」

元気な若い声に頷き返してから、頼政はあわわノ辻の真ん中へ進み出た。

これまで、鶴は常にこの辻に現れた。

その中心に頼政はあり、最大の弓隊を揃えてある。

「皆の者、構えい！」

頼政は腹の底から声を出した。

雲中にあり、居場所も定かでない鶴に、第一射で当てられるとは限らない。飛距離も射手によつて違う。できるだけ、引き付けたかった。

次の斉射までにかかる時間は、鍛錬で相当縮めた。凄まじい連射を黒雲に浴びせるのだ。

へ マカ ボダラ マニ

周囲から泰親たちの朗々たる呪が、辺りに清気を漲みなぎらせている気がした。

できるなら姿を確かめてから射たいが、黒雲が晴れる気配はない。

やがて、南東の木工寮で一斉射が始まった。もう、間近だ。

寮の手前まで、黒雲が到達した。

頼政の矢なら軽々と届く距離だが、もう少し引き付ける。

「南東に狙いを定めよ！ 十、九……」

黒き虹の先端は内裏の建物ひとつ分ほども大きさがあつた。鶴はあの中心にいるのか。

頼政は黒雲の真ん中に狙いを定めながら、キリリと弓を引き絞る。

「三、二、一……放て！」

頼政の号令と同時に矢音がし、四百本の矢が黒雲を一斉に襲った。変化はない。そのまますり抜けたのか。

「第二射、用意！ ……放て！」

二度目の一斉射が黒雲を貫いた。抜け駆けもなく、息が合っている。

「次、用意！」

頼政のかけ声を待たず、武士たちはすでに第三射の支度に入っていた。もうすぐ、黒き虹があわわノ辻の直上に架かる。

四方の射手たちは中心に立つ頼政を正面にして、上空に構えている。四百の射手がそれぞれの位置から、黒雲の上下左右を狙うのだ。

へ ハンドマ ジンバラ

黒雲は音もなく近づき、辻の上空を覆った。

「今じゃ！ 放て！」

第三射が黒雲の中へ吸い込まれていった。

無音のままだ。すべて外れたのか。あるいは、今宵も鶴が現れないのか。

黒き虹の先端が北東へ伸び、禁裏を目標している。

黒雲に吸い込まれた矢が遅れて、バラバラと雨のように落ちてきた。

「次は当てるぞ！」

四、五、六射と続けても、だめだ。

へ ハラバリタヤ ウン

黒雲は一向に晴れる気配がない。泰親たちの術が通用していないのか。さらに黒き虹は伸び、禁裏の上空へ向かった。

七、八、九射と黒雲めがけて放った矢は、手応えもなく吸い込まれるだけだ。

頼政は強い焦りを覚え始めた。

「第十射、用意！」

黒き虹には、すでに万を超える矢を浴びせたはずだ。

(何ゆえ、当たらんのかな?)

平安京の夜空に、禁裏まで及ぶ漆黒の虹が架かっている。

「乱射に入れ！」

戦いの中盤では、各自で狙って射続けよと命じてあった。

頼政は自らも強弓を引き絞る。

力の限り放った矢も、漆黒の闇に吸い込まれただけだ。

へ オン アボキヤ ベイロシヤノウ

巨大な黒き虹が、轟くように夜空で波打った後、黒い霧がゆっくりと地へ下りてきた。

辻付近の建物の二階が漆黒に呑み込まれようとしている。

視界が失われてゆく。

体が重苦しい邪気に包まれるのを感じた。

丹田がゾクリと冷えた。

頼政の本能が、逃げろと叫んでいる。

「来るぞ！ 鶴だ！」

泰親が声を張り上げる。

「丑ノ刻でございます！」

中原が絶叫した瞬間、痺れるほどの寒気が、頼政の全身をゾゾツと駆け抜けた。

「おるぞ！ 真上じゃ！」

ヒョー、ヒョー

人間を嘲笑うかのような虎鶯とらつぐみの鳴き声と同時に、漆黒の帳が下ろされた。

辺りは禍々しい気配に支配されている。

（こいつは、いかん……）

黒い霧のために、視界はほぼ失われていた。

陰陽師たちの体が白い光をまとっている。その周りと篝火近くがぼんやりと明るいだけで、他は夜の闇よりも深い黒だ。

振り返ると、指御子が神々しい光を放っていた。

頼政は弓を投げ捨て、愛刀を抜いた。もう弓は役に立つまい。

無数の矢を放って、ただの一本も当たたらぬ事態など、想定していなかった。

この暗がりですぐに刀を振り回せば、同士討ちになりかねない。

遠くで呻き声が上がった。鶴にやられたのか。

絶叫だ。助けを求めめる声が響く。

「御子、撤退じゃ！ 真つ暗闇では戦えん！」

背後に向かって頼政が叫ぶと、返事の代わりに、間近で続々と悲鳴が上がった。あたり一带に、血の嫌な臭いが立ち込めてきた。

耳を覆いたくなる咀嚼音そしゃくおんがした。生臭い。誰かが臓腑を喰われているのだ。

頼政は味方が恐慌に陥ったのを感じた。

「皆、撤退じゃ！ ただちに雲の外へ出よ！」

へ マカボダラ マニ ハンドマ

まだ光明真言を唱えているのは、半数ほどか。陰陽師もやられている。

黒い霧の中、あちこちで悲鳴がし、人の倒れる音がした。

これは戦ではない。まして退治でもない。異形による、ただの一方的な殺戮さつりくだ。

ヒョー、ヒョー

人間たちを嗤うように、鶴が鳴いた。

剣戟けんげきの音が聞こえた。同士討ちなのか。

「皆、逃げよ！ とにかく命を拾え！」

味方が殺されてゆくだけの惨状に、頼政はたまりかねて叫んだ。

あわわノ辻は、阿鼻叫喚あびきょうかんの地獄と化した。

振り返ると、咒を唱え続ける泰親の周りだけが、白光で浮かび上がっている。

「御子！ こたびは負けじゃ！ 今は逃げるぞ！」

泰親の返事はない。

「ばかめ、死ぬつもりか！」

頼政が泰親に向かって、暗がりの中を泳ぐように進んだ時——
行く手の暗がりで、黒い影が泰親を襲った。

泰親が真紅の鉄扇で応戦する。陰陽師の白光が薄くなってゆく。

鈍い音がし、泰親が呻きながら、くずおれた。

「何者じゃ！ わしが相手ぞ！」

頼政が飛び込むと、暗がりから刀が突き出された。とっさに弾く。はじ

ぼんやりとした篝火の明かりで、黒く高い鼻が見えた。人間なのか。

(もしや、黒天狗か)

鶴の正体は天狗だったというのか。物言わずに襲ってくる。

音と気配を頼りに、頼政は太刀を横へ薙いだ。

ガキツと、剣と剣が激しくぶつかった。押し込む。

「人間か？ 鶴か？ お前は何者じゃ？」

力づくで押し戻すと、黒天狗は闇に消えた。

倒れている泰親に駆け寄った。まだ息はある。

横抱きにし、おぼろに見える外の世界へ走った。

体が重く、息苦しい。邪気を吸っているせいかな。

ようやく、まともな視界が戻ってきた。

黒雲から辻の南へ抜け出すと、清新な夜の空気があった。

鳩次のほか、安倍家の者たちも見える。

必死で呼吸してから、やっと言葉が出た。

「御子の手当てを頼む」

家人たちが泰親を戸板に乗せた。右胸から腹を斬られている。

あたりを見回して、愕然とした。辻の南にいるのはたったの十数人だ。

野次馬たちも、すっかり姿を消している。

「鳩次、何人くらい闇の中におる？」

「数十人かと。生臭坊主殿の姿も見ておりませぬ。兄上とは、黒雲の中ではぐれてしまいました」

南隊の先端にいた鳩次は、頼政の撤退命令を聞き、すぐに黒雲から出られたという。

他の三つの方角から逃れた者もいようが、まだ相当な数を取り残されているはずだ。

「生臭坊主！ 隼太！ 中原！ まだ中に誰ぞおるか？ 早う出て参れ！」

辻を覆う黒雲に向かって叫んだ時、またもや断末魔のような悲鳴が上がった。

(生きたまま、喰つとるんか……)

頼政は激しい怒りを覚えた。

采配を振る将が、配下の兵たちを見捨てるわけにはいかぬ。

「頼政、助けてやってくれ。私はここで光明真言を唱える」

泰親は手当てを受けながら、血で穢れた左手で印を作っていた。

「無理をするな。悪いが、お主らの術はあまり効いとらん」

「いや、陰陽師の周りだけ漆黒が和らいでいただろう。祓いは効いている。鶴の邪気が強すぎる

ただだ。徐々にだが、辻の邪気は薄くなっている。今なら、討てるやも知れぬ」

黒き虹は健在だが、地面まで雲が下りているのは、あわわノ辻界限だけだ。最初と違って、どす黒い霧の中に、篝火のぼんやりした明かりが幾つか見えた。

へ オン アボキヤ ベイロシヤノウ

泰親のかすれ声がし始めた。

「松明を貸してくれい。わしが鶴を討つ」

「お供いたしまする！ 某が松明で照らしますゆえ、殿は存分に戦われませ」

鳩次の顔に残るあどけなさに、頼政は躊躇ちゆうちよを覚えた。だが、隼太の身を案じているのだろう。

確かに、片手が松明で塞がっているより、ずっと戦いやすい。

「参るぞ、鳩次！」

頼政は再び黒雲の中へ飛び込んだ。

「誰ぞおるか？ 頼政じゃ！ わしのもとへ参れ。まずは外へ出るぞ！」

呼びかけながら、暗がり歩いた。鶴の居場所はわからない。

「大将、外はどこですかい？」

数人の武者たちが泣きそうな声ですがりついてきた。

「おう、このまますすぐ進め。もう少し歩けば、外が見えてくる」

男たちの背を押してやった。

また、どこかで男の金切り声が出た。また、誰かが殺されている。

「逃げるは恥にあらず。今は生き延びよ！」

頼政は叫び続けた。

一人でも多く、救い出したかった。

ぼんやりした篝火を頼りに進むうち、臓腑を失った生臭坊主が転がっていた。恐怖に歪み、見開かれた目が哀れだった。

「南無阿弥陀仏、わしが仇を取ってやるでな」

頼政はしやがみ込み、瞼を閉じさせてから、両手を合わせた。

鳩次と共に、ようやく中心へ戻った。

鶴に踏みつけられたのか、座っていた床几は砕かれ、散らばっていた。

「化鳥め！ 鶴よ、わしの前に姿を現せ！」

断末魔が聞こえた。近い。

行く手に誰かが倒れているのが見えた。助け起こすと、中原だ。

勇敢にも踏みとどまったのだ。腹を切られている。鶴の仕業なのか。

「中原、しっかりせい！」

返事はないが、まだ息はある。

頼政は片手で中原を肩へ担ぎ上げた。捨て置けば、喰われかねない。

「中原を外へ出す。いったん戻るぞ、鳩次」

鳩次が照らす松明を頼りに、慎重に進む。

途中、焚かれた篝火の近くに禍々しい気配を感じた。

おぼろな明かりの下、地面に倒れた武士の腹へ、獣らしきものが顔を埋めていた。

暗がりではつきりと体は見えぬが、鹿ほどの大きさか。鶴に違いない。

化鳥が顔を上げた。異形と目が合った。

血で真っ赤に汚れた、醜い猿面だ。

(猿、じゃったのか……)

鶴の血まみれの口が、赤黒く裂けて見えた。

頼政は刀の柄を握り締めながら、対峙した。隣で鳩次も短刀を構えている。

「われらで討ち取るぞ、鳩次」

右手で太刀を構えた時、頼政の肩の上で、中原が苦しそうに呻き、吐血した。

泰親の光明真言のおかげか、南の黒霧は薄くなっている。この近きなら――

「鳩次、中原を預けて参るゆえ、睨み合っておれ。わしが戻るまで、決して手は出さな」

「合点！ 逃がしは致しませぬ！」

外の明かりを頼りに、頼政は黒雲から走り出た。

中原を安倍家の家人に任せて取って返した時、黒い霧の中で誰かが倒れる音がした。

まさか――

頼政の全身が総毛立った。慌てて黒雲の中へ取って返す。

鳩次の松明が消えていた。

さっきの篝火があった場所を感覚で見定めながら、進む。もどかしい。

「母上……」

消え入りそうな声が聞こえた。

「どこじゃ、鳩次？」

返事は、ない。

頼政は暗闇の中を彷徨するしかなかった。

必死に呼びかけ続けたが、誰も応答しない。

やがて鶴の鳴き声も、悲鳴もすっかり消えた。深夜の静寂が辺りを覆っている。

月影が差し始めた。

黒雲が薄くなってきた。みるみる霧が晴れてゆく。黒き虹もない。

何も見なかったかのように、澄んだ望月が地上の地獄を照らし出した。

消えた篝火の下に、真新しい死骸が転がっていた。臓腑が、ない。

まだあどけなさの残る顔を見て、頼政はその場にへたりこんだ。

「すまぬ、鳩次……」

頼政はまだ若い骸を抱き締めた。天に向かい、声にならぬ声で絶叫した。

6

黒雲が消え去った後のあわわノ辻を、傾いた満月が冷たく照らしていた。

まだ夜の明けぬ京の都に累々と転がる骸は、優に百を超えていよう。

血腥い臭いが、雅楽寮二階の窓辺まで漂ただよってくる。

家成が慣れぬ臭気に顔をしかめた時、背後で涼やかな声が出た。

「この部屋で、よくご覧になりましたかな？」

広賢が音もなく家成の傍らに着座した。

高燈台が不要なほど、明るい月影が部屋に差し込んでいる。

辻に近すぎては、見るべき物も見えぬからと、広賢は辻の東で見物していたはずだ。

「黒雲に覆われた後は、鶴の鳴き声と悲鳴くらいしか聞こえなんだわ」

「剣戟の音も聞こえましたが、中納言様の手の者ですか？」

広賢の問いに、家成はギクリとしたが、平静を装った。

鶴退治が成功した暁には、家成の助力を明らかにするという条件で泰親と手打ちをし、頼政の登用を認めたから、表向きは妨害しない建前だった。

「何の話じゃな？」

とぼけると、広賢が冷ややかな目で見返してきた。

元興寺がこぜに命じて野武士を十人ほど雇い、退治を邪魔するよう依頼したが、妨害など無用だったろう。命惜しさに皆、途中で逃げ出したに違いない。

「黒雲が去った後には死屍累々。まさしく地獄よ。よもや、かくもひどい負け方をするとこのう

……」

惨憺さんたんたる結末に、家成も戦慄せんりつしていた。

千の兵も万の矢も、全く通用しなかった。武士も陰陽師も為す術なく、鶴なづに弮なづり殺されただけだ。正体不明の異形に対し、手も足も出なかった。

あまりに無惨な人間の敗北が、二人から言葉を奪っていた。

戦いの前はお祭り騒ぎをしていただけに、打って変わった静寂が痛々しい。

狼の遠吠えのような泣き声が、ここまで聞こえてくる。

平安京最大の見世物に仕組まれた舞台上、辺りかまわず男泣きに泣く男は敗軍の将、源頼政だ。明るい月影の下、惨敗した戦場の真ん中で、見るもぶざまな姿を晒さらしていた。

「摂津源氏もおしまいじゃの。弱り目に祟り目よ。哀れ、貧乏くじを引きおったわい」
戦いを前に河内源氏を退けたのは、家成だ。

為義に利害得失を説き、危ない橋を渡るなと忠告した。泰親が着々と戦支度を整えてゆく様子を見て、見事退治するのではと、焦りを覚えたからだ。頼政なら、失敗しても使い捨てればよし、成功すれば鳥羽院ゆかりの北面武士として勝ち馬に乗れる。どちらに転んでもいいと考えていたが、さすがに一人負けした頼政が気の毒に思えてきた。

「落ち着いたら、何ぞ美味しいものでも食わしてやらねばのう」

場をほぐそうと、家成が軽く笑いを誘っても、広賢はいつもの憂鬱ゆううつそうな顔のままだ。

「闇の陰陽師として、今宵の戦いをいかに見た？」

「収穫はありましたな。謎を解く糸口になりそうなものが、幾つか」

広賢は低音で応じながら、辻でおいおい泣き続ける武士を遠目に眺めていた。

「泰親のことゆえ、負けた時の逃げ道は用意しておろうが、これで安倍本家は勢いを失う。賀茂家なら、鶴を倒せると思うか？」

「無理でござる」

広賢の短い即答に、家成は軽く笑った。当代の賀茂憲栄けんえいは、素人の家成から見ても、家柄だけで力のない三流陰陽師だ。愚問だったろう。

「鶴には、うかつに手を出せんな」

頼長も泰親もこれ以上、傷口を広げられまい。当面は触穢を理由に様子を見ながら、一転して守りに入るに違いなかった。

「されど、疫病と同じよ。下手に逆らわず、じっと耐えておれば、そのうち治まるわい」

誰かが何とかするだろう。家成が骨を折る必要はない。

広賢は否とも応とも言わず、無言のまま家成を見ていた。軽蔑か。

「泰親から、布留部ふるべが戻ってきたと聞き申した」

記憶を辿ってみた。安倍三流派の一角で、ひと昔前に、摂関家を呪詛するために異形の作出を試みたかどで、都から追放された闇の陰陽師だったはずだ。

「箸にも棒にも掛からぬ男じゃったな？」

「二十年ほど前は確かに。されど今は、関白と繋がっておる様子」

頼長の手の者がそこまで事情を掴んでいるなら、院近臣としても放置はできまい。

「なるほど。見えて参った。次は関白の出番というわけじゃな。悪左府が失敗すれば、己に任せよと言うておったからの。布留部なら、鶴を倒せると思うか？」

「わかりませぬ」

頼長よりは忠通が退治したほうがよいが、最良は院近臣が鶴を倒すことだ。

「博士。いずれ、そちに鶴退治を頼むやも知れん。心しておけ」

広賢が無言で一礼して去った後、家成は振り向きもせず命じた。

「元興寺よ。布留部について調べい」

「承知」

家成は窓辺で立ち上がり、あわわノ辻を見下ろした。

清目たちが現れ、骸を戸板に乗せている。

夜が明け、骸がすべて片付けられるまで、穢れを怖れて、誰も往来を通るまい。

だが陽光の下、死穢が目には見えなくなると、都人が現れる。鵠の恐怖につき、あることないこと噂しながら、当たり前前の日常へ戻るのだ。

当代最高とされる正統派の陰陽師が敗れ去った。

もしも鵠を倒さねばならぬときは、日陰を歩いてきた異端の陰陽師に任せるほかあるまい。

広賢の短めの烏帽子が辻を横切ってゆく。

その隣に、小さな影が寄り添っていた。

くづくくづく